

三脚に支えられて

東和幸

鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事

1984年 筑波大学第一学群人文学類卒業

はじめに

筑波大学の開学 30 周年をお祝い申し上げます。日ごろ先輩諸氏の各分野でのご活躍や後輩の頑張りを楽しみにしている一人である。私が入学したのは23年前の1980年であり学内の建物がほぼ整い、学外の基本的な生活環境がそろった段階ではなかったかと思う。

昨年、機会を得て久しぶりに追越学生宿舎から第一学群を歩いてみたが、昨日までそこに居たかのような錯覚を覚えさせるほど、温かく迎えてくれる学内関係者や風景を有り難く思った。違和感だったのは、何か空間が狭くなったというか引き締まってきたことであり、これは木々が生長した所為であり月日を重ねたことを物語る。

勉強から研究へ

私は幼少のころから昔の道具類に興味を持ち、中学生の時には遺跡を探し回ってい

たので、迷わず考古学を専攻した。講義や実習・サークル活動でさらに興味を引かれ、多くのことを学ぶことができた。大学の4年間で勉強の仕方は教わったけれど、自分で主体的に研究する部分が全く解っていなかった。卒業論文は研究と言うよりも事実を並べただけのもので、今考えると恥ずかしい限りである。これは卒業後目にした文章であるが、九州大学名誉教授の横山浩一先生は次のように述べている。「学生諸君には勉強しろと諭しても、おおむね無駄である。本人が追求したい問題を発見するまで待つより仕方がない。生まれてはじめて、自分で証明したい学問的仮説を考えついた学生は、一心不乱に資料を集めはじめ、道を歩いていても考えこむ。傍らから見ると熱にうかされているようである。こうなるともう勉強するなどと言われても、勉強をやめない。私はこの現象を研究者としての初体験と呼んでいる。」(横山浩一「市橋重喜

君をしのぶ』『送遠』 1991.5.3)なるほど、その通りである。

この「研究者としての初体験」は研究や学問ばかりに通用するのではなく、いろんな分野にも置き換えられると思う。スポーツであれば技術が向上して一線を越えたときであり、職人であれば納得いく品物が出来たときなどがそうなのであろう。私の小学校から高校にかけての同級生に、京都で仏像彫刻の修行を積んだ友人がいるが、彼によると自信のもてる仏像を初めて彫り上げたとき、師匠に「化けたな」と言われたという。サラリーマンであれば「仕事をさせられている」と感じる段階から、「自分で組み立てて仕事をやっているんだ」という意識に変わり、しかも仕事に対する面白みが出てきてさらに工夫を重ねて自分の仕事になった時が「研究者としての初体験」と一緒なのではなからうか。幸いに遺跡に携わる職を得て、私なりに「研究者としての初体験」を30歳前に経験することができた。「研究者としての初体験」が早いとか遅いとかという点には個人差もあろうが、経験できるようにしっかり種まきしておくことも大学の役目である。

身近な問題解決を

入学以前から現在に至るまで頭に引っかかっている点は、「なぜ遺跡を掘るのか」と

いう問いに対して明確な答えを探せないことである。入学前に読んだ本の中に長野県の考古学者藤森栄一が、「掘るだけなら掘らんでいい」という言葉をのこしている。学問的意義や法律上の面からは説明できるのであるが、根源的な部分を考えていくと「学問とは」とか「人間とは」という命題にたどり着く。他の学問分野の場合はどうなのであろうか。本来社会に貢献するための技術や学問的成果が、負の面に利用されることも多い。「利用者のモラルの方が問題である。」と言われればそれまでであるが、それぞれの学問分野において「～とは・なぜ・なんのために」を常に自問自答する姿勢があれば、自然環境や人間の心が衰退するようなことはないだろう。現場を重視するとともに、原点に立ち返る姿勢はどの分野でも必要である。

もうひとつ考えることは、自分がやってきた学問が身近にある問題の解決に対してどれほど貢献できるかということである。当時の福田学長は「問題解決型の人間であれ」としきりに言われた。些細なことかもしれないが、ゴミのポイ捨てや青少年問題などに対してそれぞれの学問分野で何ができるのか検討する機会も必要だと思う。特に筑波の玄関口であるインターチェンジのポイ捨ては散々たるものがあり、不快感を通り越している人は私一人ではないと思う。

世界的な研究学園都市を標榜する地域において、身近な問題が解決できなければ「何のための学問か」という素朴な問いに対しで答えることはできないと思う。身近な問題点に目を向けて全学的に取り組むことによって解決策を図り、全国のモデルになるようであれば、「開かれた大学」としての存在意義も大きいと考える。

おわりに

遺跡の発掘現場では、平板・レベル・トランシット・カメラと三脚が欠かせない。三脚は最少数で最も安定した状態をつくりだしている。昔から三拍子で言い尽くされた言葉の中に真実があり、三項目とも同時に充足させることによって三脚のようにバランスを保つことができる。個人的には知・徳・体、社会的には数値達成度・社会貢献度・自己充足度のバランスがとれていれば申し分ない。そのためには一人一人が快食・快眠・快便をバロメーターにし、よりよい生き方を目指したいものである。筑波大学のこれからの益々のご発展をお祈りしたい。
(ひがし かずゆき)